

談話連結された Wh 句に関する覚え書き

高橋保夫

小稿は、談話によって連結された wh 句 (discourse-linked or D-linked wh phrase) とはどのようなものであるかを考察しようとするものである。まず、なぜ談話連結の wh 句が注目されるのか、その理論的背景を概観し、次に談話連結的であるという概念に関する問題点をみていく。

(1)の疑問文のうち、(1 a) は適切な答えの領域が話し手と聞き手の状況から判断して、共通に心に抱いている本の特定の集合に限定されていて、その集合を無視して答えると不適切な答えになる。このような wh 句を Pesetsky (1987) は、談話連結の wh 句と呼んだ。そして、それは普通 which + 名詞という形をとるといふ。それに対して、(1 b) にはそのような制限がないので非談話連結の wh 句 (non-discourse-linked or non-D-linked wh phrase) といふ。

(1) a . Which book did you read?

b . What did you read?

談話連結された wh 句の特異性は、多重疑問文にあらわれる。多重疑問文とは次のようなものである。

(2) a . Who bought what?

b . * What did who buy?

(2)では、a、bどちらも主語と目的語の両方が疑問詞になっているが、(2 a)は文法的で、(2 b)は非文法的である。つまり、(2 a)では、主語のwh句がCOMP (CPの指定部)にあり、目的語のwh句は、元の位置にある。一方、(2 b)では、目的語のwh句がCOMPにあり、主語のwh句が元の位置にある。これを元の位置にあるwh句は、S構造からLFへの写像の段階で移動しているととらえ、Chomsky (1973)は、優位条件 (superiority condition) をたてた。¹

(3) Superiority Condition

No rule can involve X,Y in the structure

… X … [a … Z … WYV …] …

where the rule applies ambiguously to Z and Y and Z is superior to Y.

… the category A is ‘superior’ to the category B in the phrase marker if every major category dominating A dominating B as well but not conversely. (Chomsky 1973 p. 101)

この条件を(2)に適用すると、whoがwhatより優位にあり、COMPへ移動できるのは、whatではなく、whoであることになる。よって(2 a、b)の文法性の差が説明される。

しかし、次の例をみてみよう。

(4) a . * What did who buy?

b . Which item did which customer buy?²

(4 a)の非文法性が優位条件から正しく説明されたにもかかわらず、同じ統語構造をしている(4 b)は文法的なのである。この違いが談話連結であるかどうかの違いである。Pesetskyは、これを入れ子型依存関係条件

(nested dependency condition) という LF に課せられる条件によって説明している。

(5) Nested Dependency Condition

If two wh-trace dependencies overlap, one must contain the other. (Pesetsky 1987 p. 105)

Pesetsky は、談話連結の wh 句は LF での移動がないという。談話連結の wh 句は LF で S' に付加されるのではなく、元の位置に残ったままで、非談話連結の方は、LF で S' に付加されると考える。

(6) a. [s' who_j [s' what_i [s t_j buy t_i]]]



b. [s' which item_i [s did which customer buy t_i]]]



(6 a) では、 t_i から $what_i$ への移動が S 構造の過程で起こり、 t_j から who_j への移動が LF で起こっている。よって、移動した線と痕跡を結ぶ線が交差していて(5)に抵触する。一方、(6 b) の *which customer* は、談話連結であるので、LF で移動しないと考える。そうすると線が一本で交差のしようもないので、文法的であるということになる。

非談話連結の wh 句が LF で移動する。より正確にいうと、移動しなければならないというのは、それが数量詞 (quantifier) であって、作用域 (scope) をとるために移動しなければならないということにである。一方、談話連結の方は、数量詞ではなく、COMP 内にある Q という形態素によって束縛されるということになる。

ところで、Aoun and Li (1990) は、元の位置にある wh 句の LF 移動はないと主張している。そのかわりに、言語によって有形無形の差がある

が疑問形態素が移動するという。その議論は、only という副詞との関係で進めている。only は、痕跡ではなく、有形の要素しか修飾できない特性がある。元の位置の wh 句に関しては、その位置しか修飾できず、それゆえ、LF での移動がないという。only は、(7)にみるように、動詞とも目的語の名詞句とも結びつけることができる。しかし、(8)のように話題化してしまうと目的語の名詞句と結びつけることはできない。

(7) He only likes Mary.

- a. (he doesn't love her)
- b. (he doesn't like Sue)

(8) a. *Mary_i, he only likes t_i.

- b. *Who_i does he only like t_i? (Aoun and Li 1990 p. 206)

そして(9)は元の位置の wh 句と関係である。

(9) Who only likes what? (Aoun and Li 1990 p. 206)

Aoun and Li が LF での移動がないと主張する根拠となる(9)であるが、Cheng (1991) の調査によれば、母語話者には、(9)を解釈できないとするグループと特別な状況さえ設定すれば解釈できるというふたつのグループがあるという。Cheng は解釈できるというグループがいるということは、LF での wh 移動がないという証拠ではなくて、談話連結の wh 句が LF で移動しなくてもよいということのさらなる証拠ではないか、解釈できない人々は、who や what を談話連結的と認めない人々だといっている。

いままでの議論から、談話連結的であるという概念が非常に明確であるような印象を与えるがそうではない。そもそも、どれだけの wh 句が談話連結的に使えるかはっきりしない。

Kuroda (1968) では、(10)が適切な答えとなるような文は(11a)で(11b)ではだめだといっている。

(10) You may read Syntactic Structures or La nausée.

(11) a. Which do you prefer to read?

b. What do you prefer to read? (Kuroda 1968 p. 252)

また(12)が適切な答えとなるような文は、(13a)でも(13b)でもいいとしている。

(12) You may see Chomsky or Sartre.

(13) a. Who do you prefer to see?

b. Which one do you prefer to see? (Kuroda 1968 p. 252)

つまり、Kuroda (1968) では、whatは談話連結的wh句と認めないけれども、whoは認めるということであろうか。

Bolinger (1977) も(14a)に対して、すでにだれかがとなりの部屋にいるのがわかっているのだけれど、だれがいるのかわからない場合、(14b)のように答えることが可能であるといっている。

(14) a. Who's in the next room?

b. John and Mary are. (Bolinger 1977 p. 93)

しかし、(15a)に対しては、(15b)のように答えられないとしている。

(15) a. What's for super tonight?

b.* Bread and beans are.

c. There's bread and beans.

d. Bread and beans.

(Bolinger 1977 p. 93)

これも what が談話連結的でないということであろうが、興味深いことに私の調査によれば、(16)も(14)と同じような状況を設定すれば可能なのである、つまり、箱の中に何か入っているかわかっているけれども、何が入っているかわからない場合である。

(16) a. What's in the box?

b. Books and pencils are.

また、Pesetsky は、which 句というのは何の前もった発話もなしに、ぎっしりと本のつまった棚を見ている Mary に John がしのびよって、(17)を発することは可能であるといっているが、同じ状況で(18)も可能なのである。

(17) Which book are you planning to steal? (Pesetsky 1987 p. 123)

(18) What is your favorite?

さらに、what が談話連結的に使われていると思われるのは(19)のような例である。

(19) a. What is your blood type?³

b. What day of the week is it today?

c. What letter comes after "s"?

これらの適切な返答の領域は、まさに話し手と聞き手が心に抱いているものの集合に限定されているはずである。

こういった言語事実を観察する限り、which だけ、あるいは、which と who は談話連結的に使えるけれども、what と使えないということはできない。それぞれの wh 句に程度の差こそあれ、談話連結的に使われる可能性はあるのである。それは、言語外の情報も含むいろいろな要因が複雑にからみあっていることによると思われる。したがって、談話連結的であるという概念は、純粋に統語的分析によって解明される可能性は少なく、wh 句が使われる際の発話行為を詳細に調べる必要があると思われる。

注

1. 他の説明としては、Lasnik and Saito (1984) の ECP によるものがある。また、それでは扱えないものがあることを Cheng and Demirdash (1990) が指摘している。
2. (4 b) は、安藤他 (1993) p. 296 からの借用例である。
3. (18 a) は、Shimizu (1994) p. 31 からの借用例である。

参考文献

- 安藤貞雄、天野政千代、高見健一、『生成文法講義』(1993) 北星堂：東京。
- Aoun, Joseph and Yes-hui Audrey Li (1993) "Wh-Elements in-Situ: Syntax or LF", *Linguistic Inquiry* 24, 199-238.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London and New York.
- Cheng, Lisa (1991) On the Typology of Wh-Questions, Doctoral dissertation, MIT.
- Cheng, Lisa and Hamida Demirdash (1990) "Superiority Violations",

MIT Working Papers in Linguistics 13, 27-46.

Chomsky, Noam (1973) "Conditions on Transformations", *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by S. Anderson and Paul Kiparsky Holt, Rinehart and Winston, New York.

Kuroda, Shige-Yuki (1968) "English Relativization and Certain Related Problems", *Language* 44, 244-266.

Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1984) "On the Nature of Proper Government", *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.

Pesetsky, David (1987) "Wh-in-Situ: Movement and Unselective Binding", *The Representation of (In) definiteness*, ed. by Eric J. Reuland, and Alice G. B. ter Meulen, MIT Press, Cambridge, MA.

Shimizu, Motoko (1994) "Wh-words and Discourse Linking" *Leo* 23, Tokyo Gakugei University, Tokyo.